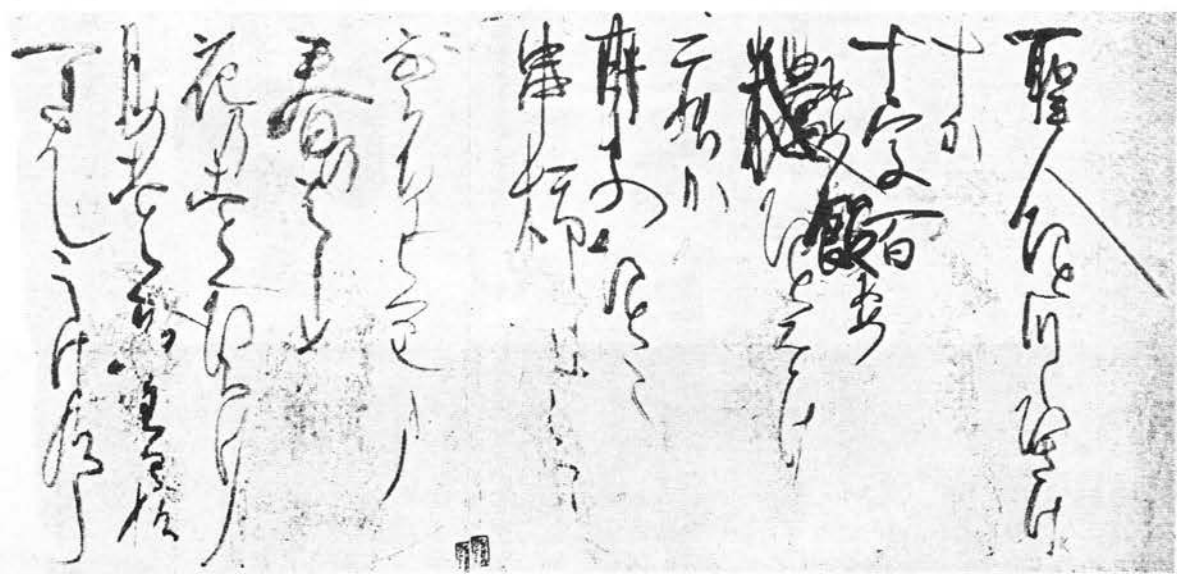




今月の御聖訓



聖人ひとつつ、(筒)ひさげ

十か、

十字百、

飴(一桶)あめひとをけ、

二升か、

柑子(一籠)ひとこ、

串柿十くし、

ならびに(送り給ひ)くり候と了ヌ。

春のはじめ御喜ビ

花のごとくひらけ、

月のごとくみたせ給ッ

べきよし、うけ給リ了ヌ。

【上野尼御前御返事 全集一五七五頁】

目次

今月の御聖訓	
迎春の辞	菅野憲道 1
年頭にあたって	尾林弘三 2
目師会講話「宮沢賢治の心と世界」	菅野憲道 3
天地つかの間〔その⑩〕	成田詳道 9
続・日興上人御本尊調査記録〔2〕	山上弘道 10
【行学研修会リレー発表④】〈私の信仰の原点を振り返って〉	吉田瑛子 13
「弟子分帳」と十七回忌〔十三〕	松田銘道 15
恵日だより	19
一月の行事 睦月詠草 訃報	

迎春の辞

菅野憲道

明けましておめでとうございます。

正月風景も年々に変わって晴れ着姿も少なくなり、餅つきやおせち料理もスーパーやデパートまかせですが、寺社参詣だけはイベント化してますますさかんのようです。

一年を無事に過ごした喜びと、新しい年を迎えての感懐は誰しも同じなのか、せめてお正月ぐらいは、怒らず、欲張らず、感謝の心をもって迎えたい気分にするのでしよう。

「おめでとう」ということは、柳田国男説によると、

「祝いというのは祭りをする人たちが行いを慎み、汚れた忌まわしいものにふれず、心静かになごやかにしていることで、その慎みが完全に守られている状態が、めでたい」ということらしい。

しかしてみると、今の世の中、行いを慎み、心静かでなごやかにいられるのもいつまでやら、松の内もたず、たちまち煩惱濁悪の姿にもどってしまうのですから「めでたさも中ぐらい」でしょうか。心の財を忘れてしまった姿は現代日本の正月風景にも反映しているのです。初詣でして神仏に祈ってはみたものの、宗教の正邪など思ってもみないのであります。

ひるがえって、私どもは、幸いにして値い難き仏法に値い、法華本門の御本尊をお祭りし、正信の法座に列して新年を迎えることが出来るのでありますから、何よりも、おめでたいのであります。世間の波は荒くとも、信心堅固に、この一年を過ごしたいものです。

ことに一昨年、昨年と当山は震災以来、多事多難で、いろいろありましたが、過ぎ去って見れば、仏祖三宝の御冥加と檀信徒の皆さんの外護により、一切の災いを転じて福となして、正信の道場として、法燈をさらに高く掲げて新年の門出をすることが出来るのでありますから、心よりおめでとうと申し述べるのであります。

日蓮大聖人曰わく。

「ただ南無妙法蓮華経とだにも唱え奉らば、滅せぬ罪やあるべき、来たらぬ福やあるべき。真実なり、甚深なり」

謹賀新年

年 頭 に あ た っ て

講頭 尾林弘三



源立寺法華講の皆様、新年あけましておめでとうございます。

源立寺の修復、周辺の整備の工事もしっかり完成し、新年を迎えることができました。皆様とともに祝いし、お慶び申し上げます。

一方、信心活動方針において、一時期の停滞もあり、活動方針、

「青年を育成し、正信の継承」

に思うような成果が見られず残念です。

「祈祷抄」に、

「大地はささばはづるとも、虚空をつなぐ者はありとも、潮のみちひぬ事
はありとも、日は西より出づるとも、法華経の行者の祈りのかなはぬ事はあ
るべからず。」（全集一三五頁）

とのご文があり、私たち正信の者の御本尊様に託する祈りの成就しないことがな
い、と仰せです。

今年は年頭に当たり、一人一人が誓願を起こし、法燈相続に、令法久住に、青
少年の育成に精進し、成果のある一年になることを念願し、新年の挨拶といたし
ます。



目師会講話(要旨)

宮沢賢治の心と世界

菅野 憲 道

本日は目師会について、例年日目上人のご一代をお話しておりますので、今年は、心の豊かさということについて申し上げたいと思います。

今年は宮沢賢治の生誕百周年にあたっており、映画や出版など、各方面に大変なブームであります。宮沢賢治とはそんなに騒がれるような人なのか、ということをもしろ不審に思うのですが、それはまたある意味で、世の中が過度な競争社会となつて、人間関係に潤いがなく、非常に冷え切つて、疲れた人が多いために、か



教壇に立つ賢治

えって現代人が失つた他人への利他の精神や、無限の空想力を持った宮沢賢治のような人が、かえって注目されるのであろうか、などと思つたりするのであります。

《宮沢賢治への評価と素顔》

もともと宮沢賢治という人をいち早く評価した人は、哲学者の谷川徹三という人でありまして、昭和十九年の九月二十二日に東京女子大において、「雨ニモマケズ」という詩を取り上げて行った講演によつてであります。谷川さんは、その詩を朗読した後、

「この詩を私は、明治以降の日本人の作つたあらゆる詩の中で、最高の詩であると思つています。もっと美しい詩、あるいはもっと深い詩というものはあるかも知れない。しかし、その精神の高さにおいて、これに比べうる詩を私は知らないのではありません。」

といつて、当時まったく無名の、東北の片田舎の童話作家の詩を取り上げて、明治以降の最高の詩であるとの評価を下したのであります。このことは五十年以上を経た今日、この詩が日本人の心を捉えて、

誰もが知っているぐらいですから、谷川徹三という人も、よほど炯眼けんがんの士であったと思うのです。

ただ、映画やテレビで宮沢賢治の一生などが取り上げられて有名人のように扱われますと、花巻の人たちは「賢治サはそんな人じゃねえ」と、よく言います。宮沢賢治という人は決して偉くもなければ有名人でもなくただの人なんだ、ただの人であるけれども我われとは少し違って、夢があつて、あるいは純粋な心、豊かな心を持っていた隣人だというんですね。それが弟の宮沢清六さんや教え子などがいまでも生きています。それが、「賢治サ（さん）」と呼んで、庶民の中に生きていて、すこしも偉ぶらない人間違ってても人を利用したり人の上に立つとうなどとしな人、一緒にいると心が豊かに、温かくなってくるような人だ、というように伝わっているものと思います。

《宮沢賢治と法華経の信仰》

それからもう一つは、宮沢賢治という人が詩とか文学の中だけで評価されるということは、ある意味で非常に偏った理解の仕方ではないのかと思うのであります。



梅原猛氏

今の時代は、オウム真理教事件や創価学会の悪影響のためもあるが、文学者が敬遠されがちで、特に宮沢賢治の信仰という面

を切り捨てる傾向が強いようですが、これでは正しい理解とはいえないと思います。

これについて、平成八年八月の『読売新聞』に、「賢治と切り離せぬ信仰」と題した梅原猛さんの小論が載っており、宮沢賢治の詩や童話の思想的背景として法華経信仰があることを論証しているのですが、大変興味深い論説です。

要点だけ申しますと、宮沢賢治が大正九年に知人に対して宛てた手紙の中で、

「これからの芸術は宗教でなくてはならず、またこれからの宗教も芸術でなくてはならない。」

といっているのですが、これは決して偶然出てきた言葉ではなくて、賢治の終生変わることのない信条であるということです。そして、有名な「雨ニモマケズ」が書かれている手帳には、後の頁に続けて南無妙法蓮華経を中心に、向って左に釈迦如来、右に多宝如来、そしてまたその左右に上行菩薩を始めとする四菩薩の名前が記されるといふ、いわゆる曼荼羅が書かれた頁があるのですが、「雨ニモマケズ」の詩が問題にされる時、この南無妙法蓮華経の曼荼羅が書かれた頁は、まったく抹殺されてしまつて触れられることがないが、しかし、考えてみるとこの詩と曼荼羅というのはい体であつて、切り離せないものではないか、と梅原さんは言っているのです。

さらに、これは度々指摘されていることですが、宮沢賢治は既に盛岡中学校を卒業した頃から、島地大等しまじだいとうという人が編集した赤い表紙のついた『妙法蓮華経』というお経本を何度も何度も読んで、深く感動し、以後の宮沢賢治の人生に非常に深い影響を及ぼ

したといわれております。賢治は、子供の頃から非常に優しい性格で、他人の痛みのわかる人間だったことが、いろんなエピソードに残っております。例えば、家業である質屋の留守番をしていて、貧しい人がお金を借りにくると、質草を取らないでお金を貸してやったり、同級生の中で誰かがいじめられていると、「その子を叩くのなら自分も叩け」といって間に入ったというような逸話が沢山残っております。利己的な殻を破って他者に共感できる、そういう人格が法華経に縁したために、精神世界が一度に大きく開かれていったようなのであります。

その法華経の思想の特色は、二乗作仏と久遠実成ですが、二乗作仏ということは、梅原さんの言葉を借りていえば、

「つまり法華経の思想的特徴は、成仏の範囲を広く人間一般に広め、さらに人間を越え、全ての有情無情に広げようとする点である。」

と、要するに「一切衆生悉有仏性」といって、すべてのものが仏性を持っている以上、十界皆成、衆生は全部成仏できるんだ、特定の人だけ、選ばれた人だけが成仏できるのではなく、虫や獣や石ころまで、有情無情にわたってすべてが成仏できるんだ、といわれているのであります。さらには、

「久遠実成とは、法華経を説いている釈迦は、あの紀元前五世紀にインドに出現した歴史的な釈迦ではなく、永遠の昔から世界でこうして法を説いている釈迦であるという思想である。」

と、要するに二乗作仏は、すべてのものが仏であるという考えですけれども、久遠実成の方は、それらのものは偶然にそこに存在するのではなく、悠久の過去から仏様とともに存在して、ずっと

昔から仏だったんだと説いているのであります。

《普遍性をもった賢治の詩と童話の世界》

また、宮沢賢治は、小説を書かないで童話と詩ばかり書いておりますが、それはなぜかといいますと、それは近代小説というのは人間の感情の起伏や、欲望とか愛憎・葛藤などというもの、すなわち心理のヒダを拡大して表現するため、どうしても人間中心になってしまうのですが、童話というのは決して人間がすべてではなく、鳥や獣や虫や植物や石ころにいたるまで、人間と同じように、あるいは人間以上に、他のもののことを思いやったり、時には自分を犠牲にして他のもののためになろうと思っている世界であるからで、そういう世界を描くには小説では無理であって、童話でなければ描けなかったというのです。

さらに、賢治は岩手県のことを「イーハトーブ」と呼んでいますが、それは決して岩手県という場所が歴史的・地理的に限定された日本の東北の一地方ではなく、実は人為的制約を超えた広大な銀河系の一惑星の一地方であり、そこで起きる事件は無限の時間や空間の広がりをもっていて、その中で起った出来事は普遍的な事件である、といえます。

要するに、我われの日常の一挙手一投足が、みな無限の時間と空間の広がりをもってしていることを示すためには、自我意識を中心とする小説では不可能で、童話とか詩でしか表すことができなかつたことでありましょう。

宮沢賢治は自我を全く無くして、全部宇宙へ還元する、あるいは永遠の時間の中にそれを消化してしまう、というような方法を

持っており、それは法華経に表れる宇宙観、世界観、時間観というものによっているのですが、そのようにして書かれた童話を、賢治は自分で「心象スケッチ」と呼んでいるのですが、それは、「賢治にとっては心象以外に外界は存在しないのであり、すべては生滅し、あるといえはあり、ないといえはない現象世界である。……天台智顛の一念三千の思想をその思想的背景にもっているからであろう。」

というふうに論じられています。

結局、法華経を読み、日蓮大聖人を信仰するという中から、法華経の二乗作仏・久遠実成という思想を、自分の生命の中に賢治は感じ取って、それを文字通り自分の表現の方法として、童話とか詩という形で表したんだ、というふうに梅原猛さんは言っているのです。

《折伏行としての創作》

さらに、そればかりではなくて、賢治がこのような作品を書くと思ったのも、もともとは法華経の行者としての自覚によるんだ、と梅原さんは言います。

それは何故かというと、大聖人によれば、現在は摂受の時代ではなくて折伏の時代である。だから現在の法華経の行者である以上、必ず折伏を行じなくてはならない。そしてそのために賢治は、浄土真宗のお寺の檀家総代になっているような熱心な念仏信者の父政次郎や、親友の保阪を一所懸命折伏するのですが、悉く失敗します。そのため、特定の個人に対しての折伏を諦めた賢治が、今度は童話という形で不特定多数の人に法華経の教えを広め、折

伏をしようとしたのではなからうかと、創作の動機付けを梅原猛さんは、見事に指摘しております。

法華経信仰を切り離しては、宮沢賢治の詩や童話はわからないということ、今の人たちは中々理解しようとしませんが、ようやく受け入れられてきたようです。

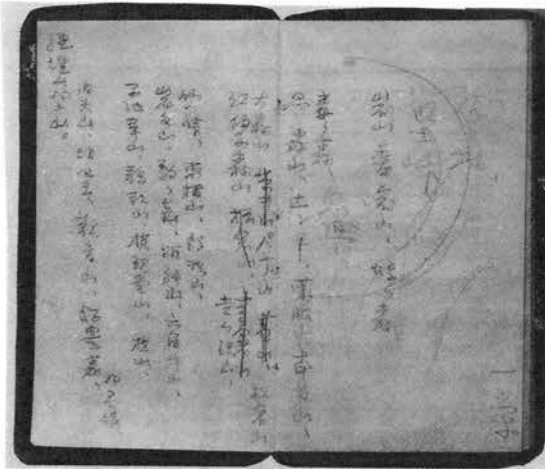
《「経埋ムベキ山」の意味》

さらには、最近話題になったことから梅原さんの説が妥当であるということがいえると思います。それは「雨ニモマケズ」の詩に続けて書かれた南無妙法蓮華経の曼荼羅の、その次の頁に書かれている「経埋ムベキ山」のことです。

これは、平安後期から鎌倉時代にかけて盛んになった法華経の埋経思想が背景にあると思うのですが、賢治が自分の友人や知人

のみならず、未来永劫に法華経を伝えてもらいたいとの願いが、こういう形で表明されたものだと思います。

しかもその「経埋ムベキ山」に列挙されている山々とは、具体的には、ちょうど北上川の流れを真ん中して、その周りに全部で三十二個の山々に法華経を埋めてもらいた



経を埋むべき山々を列挙した手帳

ということが書かれているのですが、これについて畑山博さんという人が、いろいろ研究しているうちに、これは「銀河鉄道の夜」と何らかの關係があると考えて、経を埋むべき山として書かれている場所の地図上に点を付けて結んでみたところ、ちょうどそれが空の真ん中に横たわる天の川と、そのまわりに白鳥座や射手座のような星座と同じ図が現れたのであります。

つまり、法華経を埋むべき山々というのは、そのまま宇宙の姿・銀河系を表現しているというのであります。ただし、畑山さんは賢治の思想の中心に法華経があることに賛成していませんが、しかし誰が見ても、このことは宇宙や銀河系への思慕に結論があるのではなく、法華経流布にこそ賢治のあつい思いがあったといわなければならぬでしょう。

おそらく、宮沢賢治にとつては法華経は地球のみならず、宇宙全体に流布すべき経であつて、またこの宇宙そのものが、法華経の一念三千の世界なんだということのようです。

それは「雨ニモマケズ」の詩や「銀河鉄道の夜」等の童話に示された内容も、実はかの有名な遺言と同質の、宮沢賢治の信仰の告白以外の何ものでもないということでありませう。

一連の作品に表れた賢治の豊かな心象世界というものが、どこから湧き出すのか、ただぼんやりと作品を読んでもわかりませんし、また観光気分で花巻を回ってみても、中々わからないことではないかと思ひます。

おそらくそういう豊かな発想とか、清々しい心というものは、法華経信仰というものを通して触発されて、そして広がってきたものであると考えられるのであります。

《豊かさの代わりに失ったもの》

今の人間は、生活が快適で、便利で、物が豊かにあつたら幸福になれるのではないかと思つてやってきましたのですけれども、実際にはどれほど便利な世の中になつても、どんどん生きがいや充実感を失つていようであります。かえつて物が豊かであつてもまた非常に快適で便利な世の中になつても、どんどん心の方が干涸らびてしまつて、感動したり、情熱を燃やしたりすることが少なくなつていきます。そしてわずかなことでいらいらしたり、せかせかしたり、孤独になつたりということを繰り返しているのではないかと思つてあります。

どうも考へてみると、今の人間が幸福にならうと思つてやっていることが、世の中の都合で人間が画一化され、管理されているようでありまして、ちょうど牧場とか養豚場の家畜のように、あるいは工場で生産される商品作物のようになっていふような気がするのであります。

なるほど、放牧場とか養豚場などにおいては、ある一定の衛生状態とか食料とか環境・安全性等というものは大変いいのですが、しかしそれはまったく豚としての本来の野性とか、生きていふことかと思ひます。養豚場ということが譬えが悪ければ、動物園の檻の中のライオンでもいいと思ひます。

今の人間は、近代教育を受ける中で、社会のシステムという檻の中で暮らさざるを得ない、ある種の諦念のようなものをもつてしまふんだと思ひます。そして、世俗的な価値、快適さとか安全

性とか便利さというものを求めているうちに、実は自分の精神が肉体の奴隷になってしまった、あるいは心が檻に入れられて物事にあまり感動しない、あるいはあまり激しく理想とか純粹を求めないで、ただ安全に一生食べていければいいというような考え方になってしまふのではないかと思ふのであります。

その結果、自分の存在というものは、わずか六十kgほどの肉体に押し込められた、時間的にもたった七十年ぐらいの時間でしか物事を捉えることができないような、そういう人生観になってしまつていのではないでしようか。

とても宮沢賢治のように自分という存在を、動物や虫や植物や石ころにいたるまで、全部連続した自分の世界だというような、あるいはまた、我われは悠久の過去からの未来永遠に仏とともに永遠のいのちを生きているんだというような感覚を、ついで我われはもつことができないのではないかと思ふのであります。

これはまた、日蓮大聖人が雪中の佐渡で抱かれた感懐、「日蓮は貧道の身ではあるけれども、当世日本国に第一に富めるものは日蓮なるべし」といわれたような、心象の豊かさというものを、精神的に貧しくなった現代人はついに想像できないのであります。要するに、本当に自分が幸福であるかないかということとは、決してどんなものを所有しているかというようなこと、あるいはどれだけ快適で楽な人生を送ったかということではなくて、自分の人生にどういふ態度で望んでいったか、どういふ生き方をしたかということが大切になってくるのであります。

結局それも、自分の精神世界というものがどれほどの広がりをもっていたのであるか、心がどれほどの豊かさであったのかとい

うことに、懸かってくるのではないかと思ふのであります。

《心の豊かさとは》

日目上人が七十四歳で天奏の途上、正慶二年十一月十五日、美濃の垂井宿において亡くなられ、辞世の歌に、

代々を経て 思おもをつむぞ 富士のねの

煙よをよべ 雲の上まで (富要四一九〇頁)

とあります。この辞世には自分はここで入滅しても、その願いは富士門流に受け継がれて未来永劫に法華経を弘通していくんだ、広宣流布の大願は決して途絶えるものではないということを表明されているのであります。

そのことは、日目という一人の人間の肉体は朽ち果てても、そのいのちは未来永劫にわたって法華経・大聖人・日興上人とともにあり、一切衆生の煩惱の闇を照らすんだという信仰の裏付けがあるのであります。

本当の富者、真の幸福とは、いづれは朽ち果ててしまう肉体的生命をいたづらに維持するだけではなく、その生命の燃焼を、正しい信仰によって、一切衆生のために生かしたとき、はじめて永遠の輝きを獲得するものと思ふのであります。

本当の心の豊かさというものは、教養知識の豊かさではなくて、正しい仏法によって真の自己を見いだした人、人生の意味を発見した人にこそ開かれるのではないでしようか。我われが朝夕お題目を唱えて願うことは自分の心、自分のいのちを本仏の寿命と一体化させて、廣大無辺の仏の世界を蘇生させていくことではないかと思ふのであります。

(了)

昭和三十五年の発売で、守屋浩の「ありがたや節」という歌が、大流行した。このころは、一曲の歌が当たると数年も、歌い継がれた時代だった。

私が出家した後のこと、本山で先輩の一人が、この歌を大声でうたっていたのを、どうしたわけか、日達上人が聞きつけて、「そんな歌をうたうのはヤメロ」と、かなり激しく怒られた記憶がある。

天地つかの間

〔その十七〕

成田 詳道

その歌詞は、すこしばかり世をすねて、斜にかまえた、軽薄な歌だったと思う。私は子供ながらに（お坊さんには、歌ってよい歌と、悪い歌があるんだなあ）と、肅然とした思いになった。

俗に「歌は世につれ、世は歌につれ」というが、思い返すと、あの歌詞と世相にはあたかも、時宗の祖・一遍の始めた「踊り念仏」の風潮と、相通ずるものがあつたように思う。

日達上人はそんな空気が、本山の小僧の生活に悪影響すること、忌み嫌われたのかと、追想したりする。

ところで、「生活に密着した信心」というが、信仰が誤った形で現実生活、目先の生活に密着すると、真言のご祈祷や、靈感商法、占い判断などは、おおいに受け入れ



踊る一遍（「一遍上人絵伝」）

やすく、即効性もあり、逆に離れすぎれば、念仏の現世厭離、浄土願望につながって、現実からの逃避を奨励しかねない。

当家の信仰は欲望を消滅させるでなく、野放しにするでもない、コントロールセーブしつつ、一步上を目指す、努力進行中の形態をもってベスト（成仏）とする。成果よりも未完成の妙味を、持続させるとでも

言うか。その姿勢が生活の中に、生かされれば、理想の密着といえよう。

つまり「生活に密着する」生活とは、日々に移り変わる有為転変や、煩惱むき出しの姿でなく、本来あるべき姿。その時々欲望や、感情に支配されない、永い目でみた、人生の生き方といえる。

ところが時間の過ぎゆく速度が、日増しにはやまる現代は、ナガイ目で見ることが難しい。いきおい結論を急ぎ、途中経過は軽視され、損か得か、役にたつか否か、といった目前の結果がすべてになる。これでは世間ですら、人は育たないし、よい仕事も生れない。

あの人は教学がある、信心があるなどと、褒めそやすが、たいがいは表面的な姿だけを、評価していることが多い。よい見本が覚醒運動の初期、阿部日頭師は「大石寺の灯燭代は創価学会によつてまかなわれている云々」と言つて、正信会の学会批判を一蹴した。「長いあいだ教学部長を務めた人が、どうしたのでしょうか？」などと聞かれ、もしたが、現実生活を重視したつもりで、実際は信仰生活を忘却し、現実生活も無軌道にしてしまった。もつて他山の石ならぬ石山（大石寺）の徒である。（源立寺執事）

続・日興上人御本尊調査記録〔二〕

山上弘道

〔平成八年十月十四日 伊東市川奈
蓮慶寺調査 伊豆実成寺末〕

八月の実成寺調査の折、蓮慶寺さんには日興上人御本尊の写真撮影の許可を戴いている。季節的にもいい頃だし、十月十五日に保田妙本寺の御虫払いに行く予定なので、何度も集まるのは不経済だからこの際お願いしようと思つたと連絡をとると、午前中ならばいいとのことであつた。今回は関東軍と西からは大谷師が加わつて、朝霞を午前五時に出発。空模様はどうもよろしくない。環状八号線から東名高速に乗り、厚木でおおりて厚木小田原道路、それから真鶴道路で熱海を抜けて伊東に近づく頃には、何やらぼつりぼつりときはじめた。約束の九時にはまだ三十分以上はやいがそれ急げと蓮慶寺の門を叩いた。降ってききましたねえといいな

がら蓮慶寺さんは出てこられた。少しでもはやい方がいいと思ひましてと、少々はやかたつたことをお詫びしながら、われわれは早速撮影の準備にとりかかつた。

当御本尊は『日興上人御本尊集』に、写真が掲載できなかったがそのデータと図版が紹介されている。今調査において再度確認したが新たな発見や訂正すべきことはない。ここに再度データを掲げる。

一、日興上人御本尊 元亨四年卯月八日
縦九一・八cm 横五〇・五cm 一紙

脇書「下山五郎法号妙□ 三十三年」

「法号妙□」は二行で記されている。妙は左半分が切断されており判読である。□は「為」のようでもあるが今回も不明とせざるをえなかつた。下山氏は『弟子分本尊目録』及び『富士一跡門徒存知事』に登場する「下山左衛門四郎（光長）」やその師

である因幡日永が日興上人に離反したものの、下山兵庫五郎の後家、子息又四郎光宗、下山平泉寺尼、下山たいふ房□□あま、下山車師とその後家尼、その娘で久富五郎三郎入道蓮実の妻、などが日興上人御本尊に登場する。下山五郎は逆算すると正応五年の寂であり、その子孫は同氏の信仰をしっかりと受け継いでいたことがわかる。当御本尊の翌年正中二年に、下山兵庫五郎の三十三歳供養菩提の為の御本尊が子息又四郎光宗に授与されており、年齢的にも信仰的にも二人は近かつたものと思われる。

撮影が終わりがたづけを始める頃には、外は本降りになつてきた。お茶を戴いた後本堂の御本尊を拝見すると、嘉元四年三月日の日興上人の板御本尊であつた。この板御本尊は門下地域を問わず実に多い。御影様は室町時代のもので読経像である。



伊東市川奈・蓮慶寺

十時、御礼を申し上げて蓮慶寺を辞した。蓮慶寺の程近く吉田に西山本門寺の貫主が住職をしている光栄寺がある。せっかく伊東に行くのだし、『日興上人御本尊集』を編纂するにあたってご協力を戴いた御礼も直接にはしていない。西山本門寺文書についてのお願ひもあるし、この際お伺いし

ておこうとあらかじめ連絡を取り、午後一時に約束をしている。一時までは随分時間があるので近くの公園で時間をつぶし定刻に光栄寺を訪れた。

子息である執事さんに部屋に案内されお待ちしていると、程なく貫主上人が出てこられた。われわれはまず『日興上人御本尊集』『日興上人全集』編纂に協力していただいたことに、心より御礼を申し上げた。当寺には日蓮大聖人御書断簡が所蔵されている。他にも重宝がないか尋ねてみると、日興上人御本尊が三紙の内一番下の一紙があり、また三位日順師の御本尊などもあるということである。御虫払いは内々で不定期に行うのだそうである。その内是非とも拝見させていただきたいとお願ひした。御返事は曖昧であったが断られなかったのを良しとしなければなるまい。ついでに西山本門寺の御虫払いの折に数々の重宝を冥見させていただき、できれば写真撮影も御許願ひしたい旨を率直に申し上げると、善処しましょうと行って下さった。

ちなみにこの大聖人御書断簡は『昭和新定日蓮大聖人御書』（三一―二六一―七頁）、『昭和定本日蓮聖人遺文』（四―二九二―九

頁）に掲載されているが、両者の読みが微妙に違い、是非とも実見の上確かめたいと思う。

「此何人耶 答云 一人なり 萬人一同の悪義（『定本』悪心）を起す かるがゆえに起なり 問云 何をもち（『定本』ん）てかこれを信せん 答云 明鏡あり 眼あらは汝これを見よ 大集（『定本』なに）経に梵天帝釈日月四天 □□□□」

小一時間ほどお邪魔をしただろうか。今後のことをくれぐれもお願ひして光栄寺を辞し、雨の中を帰路についた。明日の天気は大丈夫だろうか。

（平成八年十月十五日
保田妙本寺調査）

翌日は昨日の天気が嘘のように晴れわたった。午前十時妙本寺に到着。貫主上人、鎌倉修郷師は既に本堂におられた。すぐに法要がはじまる。終了の後ご宝物を拝観する。昨年は日興上人の御本尊、書状を中心に拝見させていただき、寸法や脇書等がわかつていたので、今年はこれらの再度の確認と、法擘師が来年継命新聞社から出版さ

れる予定の『日目上人』編纂をしており、当寺には日目上人の書状が多く所蔵されているので、その確認が主目的である。

まず日興上人御本尊脇書で新たにわかったことであるが、『日興上人御本尊集』一三頁、目録番号九五、延慶二年十月十三日の御本尊の日目上人添え書き「越後国孫右衛門妻申与」と読んでいたのが、「孫太郎妻女申与」であることが確認された。これは修郷師が御本尊奉納の時に、千葉県史料研究財団の人達に読み聞かせている中で、「これは孫太郎ですかねえ」と相槌を求められたので、見てみればまごうことなくそうで、われわれが誤読をしているのに気がついた次第。以前は「孫左衛門」と読まれていたのを「孫右衛門」と読みかえたのだが、とんだ間違いであった。去年はあせっていたこともあるが、こんなイージーミスをするとは。越後の孫太郎と読めば大石記に「仰せに云く、越後国の法華宗平孫太郎助時は法すきの者なりしが伊賀の阿闍梨を教化して日目上人へ参らす。其後又安房の宰相日郷を教化して先づ甲斐国に遣わす。云々」と

あり、おそらくこれらは同人であろうから、この文の信憑性も俄然高くなってくる。

次に同寺では日蓮大聖人筆として伝わる『南条兵衛七郎御書』の最末部断簡が、



保田妙本寺の山門前で（左から二番目が山上師）

去年法暉師が遠目ながら日興上人の御文字ではないかと推測した如く、今回手にとつて拝見しほぼ日興上人筆であるとの確証がえられた。ただし「こそ」を「古曾」「な

む」を「奈無」と行書に近い書き方で記されるのは、管見では今まで見られない用例で今後注意しておくべき事柄である。なお、本来大聖人の署名が記される部分がきれいに切落しているのは、かえすがえす残念であった。北山本門寺蔵の同書日興上人の写本には、「日蓮」とのみあつて「在判」と記されていない。他の写本には必ず記されていることをもつて、かつてこの時期（文永元年）に大聖人は花押を遣われていなかったのでは、と推測したことがあつたのである。

その他日目上人の書状や申状について、法暉師はさすがに編集に携わっているだけあつて、拝見する姿勢にも気迫がこもり、いくつかのしかもかなり重要な発見をしたようである。こちらもそれにつられて若干のアドバイスもし得た。その成果はいずれ発表されるであろうからここでは割愛する。この日は妙に暖かく蚊の攻撃に悩まされた。帰りの道すがら頭がかゆくてポリポリかいていると、後ろの座席から頭がゴポゴポですよといわれた。私ばかりがこんなにやられたのはやはり地べたが多いせいだったのだろうか。

私の信仰の原点を振り返って

宝塚地区 吉田 瑛子



私の入信の動機は姑さんの病気でした。

それもノイローゼ、そこからいろいろな病気になる、入退院を十年間繰り返してしました。

私も子供を負ぶって病院通い、家には昔から近くの方が手伝いに来てくれていました。この方が創価学会に入信していて、姑さんに毎月『大白蓮華』を持って来ては、枕元で折伏をしていました。

「わてはもう死ぬ人間、今更信心なんかできまへん。それより若い者に聞かせてやっして下さい。」

と言ったのが縁で、私は全く別の人から誘われて入信いたしました。

入信して間もなく学会の大幹部が座談会に来たので、

「何故、来た嫁が姑さんの病気の世話を何回もしなければいけないのかしら……?。」

と質問したところ、

「あんたが悪い……。」

と一言いわれただけで、私も何故ですかと聞こうとしましたが、その幹部は質問責めにあい、すぐ席を後にしましたので、私は不信に陥るばかりでした。この時より、信心はお寺と両方で行こうと決意しました。そして、入信は甲子園の正蓮寺でしましたが、交通の便の良い源立寺へ毎月お講に通うことにしました。そのお講の時の御書の一節に、

「蔵の財よりも身の財すぐれたり。身の財より心の財第一なり。」（崇峻天皇御書 全集一―七三頁）

の言葉が耳に残り、「姑さんには、これだ」と強く感じました。現在も信心の原点にしている御書です。

姑さんは吉田家の六代目の人で、それまでは全盛期で過ぎましたので、一応大事なものは今この所に運び込まれてはいたものの、大東亜戦争で大きな商いをしていた大

阪の家が空襲で焼け、さらに終戦後は相続税のこともあり、お金の価値を知らない姑さんは、なし崩しの生活でしたから、税金も払いきれず、今の所の地震前の家も差し押さえの紙を貼られる始末。それから主人の安い月給で、毎月返済することになり、やつと現在の所が持ちこたえられませんでした。

姑さんは昔の華やかな生活が忘れられず、蔵にある物をお金に換えて、自分の小遣いにしていましたが、少々高価な物でも売る段になれば二束三文。本人には満足感がなく、それも私たちに内緒で売っているのでも心労が増すばかり。病気になるらざるを得ません。わかつたのもお手伝いさんが、古物商に持つていった交通費を一度も貰ってないと、私に打ち明けたことからでした。

忘れもしません、その頃私は入信日には毎年お寺に参詣していましたが、入信八年目の年にして、たつた八百円の御供養が持つて行きかねました。姑さんの入院費も嵩み、私たちの生活も大変な時だったからでした。

このように、原因がはつきりしましたので、私も腹が立ちましたが、暖かく包んであげるしかないと思い実行し、また姑さんは妃さん（蛇）を大切にして庭で祭つてい

ましたが、謗法払いをしてもらいましたところ、それから五年間は元気で過ごし、最後は胃ガンで入院しましたが、その最中に私の長男が交通事故で足を骨折して入院。いつべんに二人の入院で、これまた大変でした。

その後、姑さんは七十九歳で他界しましたが、主人は信心に強く反対するし、三障四魔が紛然といつたところでしたが、丁度その頃に、創価学会の逸脱・謗法を源立寺で聞き、脱会をして法華講に入れていただきました。

菅野ご住職様になり、講義を聴き、自身自身の信心の姿勢をただしながら、信心の確信がでてきましたので、我が家の念仏の謗法払いをして、御本尊様をお掛けして一年目に、姑さんの七回忌を正宗でさせて戴きました。

その後、私の母があと三ヶ月の余命と言われた時に、私の兄嫁が親を見るのを拒否したもので引き取り、弱っていました。私の長男の車に載せて母をお寺に連れていき、ご住職より御授戒を受けましたところ、それから元気になって、三年余り延命して八十九歳で他界しました。結果、二人の母を見たことになりました。

こうしているうちに、いささかの心の財を積むことができたのでしょうか、それはこの度の阪神淡路大震災でよくわかりました。

我が家が全壊になりました折り、ご住職より住むところやお仏壇を預けるところのご心配をいただくお電話をいただき、本当に有り難く思いました。



笑顔で発表される吉田さん

住むところは、地震の夜から息子のところへ行きましたが、同じ宝塚市でもガス・水道・電気が通っていて、大変うれしかったです。そして、仏壇は古い大きな仏壇でしたが、早速手配していただき一年間預かっていただきました。

宝塚市は被災者が少なく、全員に仮設住宅が当たり、それも2×4で建築された

仮設に入居させてもらい、人間はただで、古い荷物は大きな倉庫を借りて毎月家賃を払っていました。

建築する家のプランも、ご住職様に厚くましく見てもらいましたが、計画通りの建築屋さんが仮設の並びの息子さんと、大変お世話になりました。これも偶然でした。

地鎮祭の時も、風速五十メートルの台風が接近とかで心配しましたが、それてくれたので、強風の中ではありましたがご住職の読経で無事終らせていただきました。

この度は、僅かな地震保険も満額おり、そして人様の力をお借りして、何もかもトントン拍子に進みました。ご本尊様、ご住職様、皆様方、有り難うございますと、感謝のお題目をあげざるを得ませんでした。「災い転じて福となす」とは、このことだと思いました。

でも、大きなローンを抱えての建築、これも常に原点に戻って、信心に精進していかねばと思っております。

最後になりましたが、源立寺の法華講の皆様方より、また全国正信会の皆様よりお見舞いと暖かいご支援をいただきましたこと、心より厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

「弟子分帳」と十七回忌「十三」

松田 銘道

二、「立正安国論」と蒙古襲来

文永五年から六年にかけての度々の諫言は、身命に及ぶ大難を必ず引き起こすであろうと覚悟されていた大聖人でしたが、それは二年後の文永八年九月十二日、竜の口法難となつてあらわれず。

この法難の意義は単に歴史上の一事件にとどまらず、その歴史的背景や、また法華経の身読という立場からも重要な意義を有



刑場跡地といわれる竜口寺

していますが、ここでは歴史的背景に焦点をあてて述べてみます。

「立正安国論」での二つの大難の予証は、一つは蒙古の襲来という形であられ、もう一つは佐渡流罪の身となられた大聖人が、「相州は日蓮を流罪して百日の内に兵乱に遇へり」

(「四信五品抄」全集三四二頁)と述べられた幕府の兵乱―二月騒動―という形であられました。

異国の侵略と自国の兵乱、一見まったく異なるように思われる二つの事件は、蒙古襲来という点で深く関わっていました。中尾堯氏は二月騒動の背景について次のように述べています。

「文永九年の二月には、鎌倉幕府にとって重大な事件が起こりました。それは鎌倉幕府の執権北条時宗が、実兄の北条時輔を京都の六波羅に攻めて殺し、その一

族にあたる名越時章・教時と千波盛直らを滅ぼすという、いわゆる『二月騒動』

です。北条時輔は、京都の守護と政務を担当する『六波羅探題』という、幕府にとって重要な地位についていました。ところが、時宗と兼ねてから意見があわず、とくに蒙古との外交方針をめぐって、意見相違があつたといわれます。…日蓮聖人が幕府によって捕らえられた直後、

鎌倉幕府は御家人の武士に動員令を発しました。それは、九州に所領をもつ御家人は、その地に赴いて蒙古の攻撃に対する防衛態勢を整えよという命令です」(「日蓮聖人のご真蹟を観る」『法華』八五四号所収、二〇頁)

ここには二つの興味あることが述べられています。

一つは執権時宗と実兄時輔との対立の原因に、蒙古に関する外交方針で意見の相違

があつたという指摘です。両者でどのような意見の対立があり、またどんな応酬が行われたのか、その具体的な内容は示されていませんが、蒙古への対策が自国での兵乱にまで発展したとなれば、異国の襲来が幕府にとつていかに衝撃が大きかつたかを物語つていましょう。それはもう一つの指摘である竜の口法難の翌十三日に幕府が御家人に出した動員令とも関連しています。

動員令とは次の内容をもつ「関東御教書」のことです。

「蒙古人来襲すべき由、その聞こえあるの間、御家人を鎮西に差し遣わすところなり。早速、自身〇〇国所領に下向し、守護人に相伴し、且は異国の防御を致さしめ、且は領内の悪党を鎮むべし」

文永八年九月十三日 (時宗) 相模守花押
(政村) 左京権大夫花押

〇〇〇〇等」

（『鎌倉遺文』一四一三〇〇頁）

この御教書は、蒙古防衛対策にあたって九州・中国地方に所領をもつ御家人および幕僚クラス—御教書の〇〇〇〇等—に対して、その所領の国—御教書の〇〇〇国—への下向と所領内の悪党鎮圧を命じたものです。蒙古対策及び悪党鎮圧の御教書が十三日



大聖人の予言通り起こった蒙古の襲来（『日蓮聖人御一代絵図』）

一斉に出されたことと、前日に大聖人を逮捕し斬首しようとした幕府の処置は、中尾氏が指摘しているように一体のものであつたことはまず間違いないでしょう。このことは高木豊氏も次のように述べています。

「文永八年九月十三日、幕府は、九州に所領をもつ関東在住の御家人に九州に

領に下向して、蒙古防衛体制下に入る」とと所領内の悪党鎮圧を命じた。この前日、幕府は日蓮とその門弟の弾圧をはじめ、日蓮等を鎌倉における悪党視してのことで、日蓮は佐渡に流される」

（「死をめぐる日蓮の二、三の文章」『国語と国文学』八〇二号一〇四頁）

ここでは大聖人およびその門下を「悪党視」しての弾圧であつたと指摘しています。「悪党視」が弾圧の主な理由であつたことは、法難の翌年二月に佐渡で認められた書状「開目抄」の一文からも窺うことができます。

「今度はすでに我が身命に及ぶ。其の上弟子といひ、檀那といひ、わづかの聴聞の俗人など来て重科に行はる。謀反などの者のごとし」

（全集二〇〇頁）

幕府が大聖人とその一門の人びとを「重科」の者として、徹底して取り締まった様子が知れます。しかも、取り締まりの対象者は、弟子檀那のみならず法門を聞いただけの俗人までも「謀叛などの者」と見なすほど徹底したものでした。「重科」「謀叛」との表記は、なによりも門下全体を「悪党視」

しての弾圧であつたことを物語つてくれます。

また、佐渡配流への道中で認められた十月二十二日の書状「寺泊御書」においても、

「彼等が云う一大悪人とは日蓮に当れり。

一切の悪人之人に集まるとは、日蓮が弟子等是なり」(全集九五二頁)

と述べられていることから、法難を機によりいつそう彼等諸宗がござつて大聖人と門下を悪党視してきたことが知れます。

蒙古対策とともに悪党対策が強化された経緯については海津氏が、

「御家人が『且つは異国の防御を致さしめ、且つは領内の悪党を鎮むべし』と命じられたように、対モンゴル戦争の遂行過程で悪党への追捕体制は漸次強化された」(『中世の変革と徳政』二二一頁)

と指摘しているように、御教書の発令を機に悪党対策もあわせて強化されていきます。幕府が御教書を発令する前日に大聖人を処刑しようと企てたことは、鎌倉での悪党鎮圧の施行にとどまらず、御家人に対する御教書の効果―領内の悪党鎮圧―をも狙っていたものと思われまゝ。鎌倉の悪党集団―大聖人と門下―を弾圧し、その余勢でもって御家人への効果を狙った幕府でありま

したが、それも五ヶ月後に生じた「二月騒動」によつて大聖人門下への対応に変化が生じてきました。建治二年三月―建治元年の説もあり―の書状「光日房御書」には次のように述べられています。

「二月十一日に、日本国のかためたるべき大将どもよしなく打ちころされぬ、天のせめという事あらはなり。此れにやをどろかれけん、弟子どもゆるされぬ」

(全集九二七頁)

六波羅探題との兵乱―二月騒動―を大聖人が予証されていた自界叛逆難の的ではないかと驚いた幕府は、その直後に捕縛した門下の人びとを釈放しています。

また、大聖人は予証の中によつて自らの赦免も間近いことをこの時確信したとも述べられています。その赦免はそれより二年後の文永十一年二月に実現し、しかもその年の十月に蒙古が襲来し他国侵逼難の予証が的中したことは、二月騒動後の幕府の対応と照らして興味あることです。

それは鎌倉入りした大聖人と文永十一年四月八日対面した幕府側の態度にもあらわれています。建治元年―建治二年の説もあり―の書状「種種御振舞御書」には、対面の様子を次のように記されています。

「さきにはにるべくもなく威儀を和らげてただしくする上、或る入道は念仏をとふ、或る俗は真言をとふ、或る人は禅をとふ、平左衛門尉は爾前得道の有無をとふ。一に経文を引て申しぬ。平の左衛門尉は上の御使の様にて、大蒙古国はいつか渡り候べきと申す。日蓮答えて云く今年は一定なり」(全集九二二頁)

竜の口法難の首謀者であつた平左衛門も法難前とは一変して「威儀を和らげてただしくして」臨んでいます。それは「大蒙古国はいつか渡り候べき」との質問を投げかけてきたように、大聖人が蒙古襲来の時期をどう予証しているのかに強い関心があつたからに他なりません。しかもそれは「上の御使の様にて」と、執権時宗の意を受けての質問でもありました。

「今年は一定なり」との返答におそらく驚きもしたでしょうが、ともかく蒙古襲来についてはなりふり構わず関心を示してきました。「真言師・総じて当世の法師等をもつて御祈り有るべからず」(同)と、諸宗を用いての祈祷はかえつて国を滅ぼすとの大聖人の諫言には終に耳を傾けなかつたその態度とはまるで裏腹です。幕府の相反する態度から、いかに蒙古対策に苦慮して

いたかがかえって伝わってきます。

大聖人が予証された通り十月に蒙古が襲来します。幕府は寺社に対して異国降伏の祈祷命令を出し続けますが、幕府のこうした政策が悪党鎮圧への流れをさらに加速させていきます。海津氏は異国降伏と悪党鎮圧との関連を次のように述べています。

「蒙古襲来を境として、異国人のみならず、国内の敵対者をも厳しく差別し、卑賤視する思潮が勃興してきた。寺社勢力が敵対者を、悪党とか異類異形（化物）とか決めつけて糾弾するのは、この思潮

にもとづいていた。蒙古襲来を畏怖する日本人は仏神への依存心を深めていたため、その仏神に敵対するものは国土の怨敵＝悪党と考えたのである。寺社勢力は、対外戦争で増幅された民衆の危機意識を利用しつつ、所領内の敵対者を排除していった。国家への敵対者に悪党の烙印を押し、弾圧するのは、蒙古襲来の緊張状況である十三世紀末から十四世紀に固有な事態だったのである」

（『神風と悪党の世紀』八五頁）

ここには蒙古襲来によって仏神への依存心が深まってきたことを利用して、寺社が都合よく悪党を生み出している構図が見え

てきます。前節で触れたように、幕府の祈祷命令に対して寺社は神々の戦争参加とその功績を競い合います。それはまた寺社の勢力拡大のために悪党を生み出すことにもつながっていました。仏神への敵対者＝悪党というレッテル貼りは、寺社が蒙古への異常な危機意識を巧みに利用した政策といえます。ここに大聖人が再三にわたって諸宗一丸となつての祈祷は、かえって国を滅ぼすと諫言されたその基因と構図とを見ることができま

す。四月八日の対面後、「三度国をいさむるに用ひずば山林にまじはれといふことは、定まるれいなり」（『報恩抄』全集三三三頁）と、鎌倉を退出し身延に上山された大聖人ではありましたが、予証した蒙古襲来が入山後間もなくして現実化しただけに情報の手は驚くほど早く、十一月十一日の書状「上野殿御返事」には、老岐・対馬の状況について次のように触れられています。

「抑日蓮は日本国をたすけんとふかくおもへども、日本国の上下万人一同に、国のほろぶべきゆへにや、用ひられざる上、度度あだ（怨）をなさるれば、力をよばず山林にまじはり候ひぬ。大蒙古国よりよせて候と申せば、申せし事を御用ひあら

ばいかになんどあはれなり。皆人の当時のいき（老岐）つしま（対馬）のやうにならせ給はん事、おもひやり候へばなみだ（涙）もとまらず」（全集一五〇九頁）

蒙古襲来によつて受けた被害と衝撃は想像したよりはるかに大きいものでした。それはこれより鎌倉幕府が滅亡（一三三三年）し、さらに元の滅亡（一三六八年）後の約一世紀に亘つて、蒙古襲来の噂と恐怖に一国が脅かされ続けたという歴史的事実が何よりの証拠として私たちに語りかけてくれます。

大聖人は文永の役以後も、数多くの書状で「立正安国論」の予証について警鐘を鳴らし続けられました。なかでも弘安二年の熱原法難の渦中に認められた「瀧泉寺申状」は、「立正安国論」の予証が主眼となつて構成されています。晩年にいたつてなお「立正安国論」の予証を強調された背景には、幕府と諸宗が一体となつて異国降伏の祈祷を行い大聖人門下を悪党視しての弾圧は国を滅亡の道へ導くと強く憂えられていたことと、「立正安国論」の予証が再び現実化するとの危惧をますます強く懐かれていたからではないかと思われま

す。（つづく・正覚院主管）



修復がすべて完成した源立寺

恵日だより

南近畿教区一日研修会

十一月二十四日（日）

すでに継命新聞で報道されたように、昨年の教区行事の掉尾をかざる、法華講大会が、森ノ宮のアピオ大阪小ホールにて、開催された。当日は予定した司会者の都合が悪くなり、板垣真弓さんがピンチヒッターとして、起用された。板垣さんは、当寺の法華講総会などで、何度も司会を経験したベテラン（？）女子部なので、参加者は安心して進行の舵取りを見守った。

各講中の代表者が登壇し、みな熱心に発表された。我が講中からは、青年部の宮崎智和君が登壇し、青年部の活動低迷の原因と苦悩を

吐き出し、もって今後の奮起を誓うという、珍無類にして元気いっぱい、ユーモア満載の発表をし、満場を爆笑でどよめかせた。

なお、源立寺から新谷美奈子、森下典子、森下朋子さんの美女三名が、受付係を努めてくれたことは、出色の出来映えだったといえよう。



研修会の受付係を努めた新谷さんと森下さん姉妹（右）

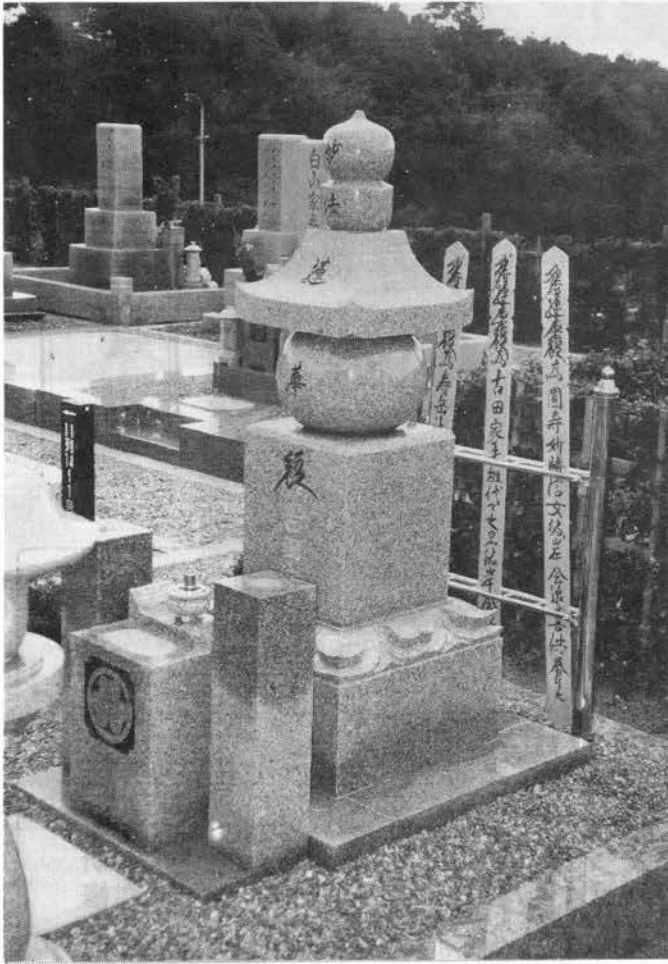
雑報

◎五輪塔の建墓

このほど蛸池地区の古田和正さんは先に母堂を送られ、その七回忌を前に北摂霊園に五輪塔の墓石を立てられた。建墓にあたっては最も理想的な墓標を作りた

意義を持ち、塔婆と同じ意義を持つこと、妙法五字は五大に通ずること、石塔の時代的推移などを学んだ結果、家族で相談して鎌倉期の様式で五輪塔の墓石を立てることに決した。幸い良心的な石材店もみつかり、大島石をもって立派な五輪塔が完成して、ご住職の導師によって無事開眼・納骨を終えられた。

何かのご参考にその写真を掲載します。



鎌倉時代の形を伝える完成した五輪塔

【訃報】

〔池田市〕
芳秋院妙香信女 十二月一日寂

俗名 高寺芳子之霊 行年 七十三歳

〔吹田市〕
順正院法勇信士 十二月十日寂

俗名 笹川達勇之霊 行年 六十二歳

この度、右の方々が無事お祈りされました。
謹んでご冥福をお祈りします。

【睦月詠草】

戦線に 迎え正月 〔橋本 義一〕
ただ願う
生きて還らん 母待つ国へ

墓石に 妻生くるがごと 呼びかくる
友の白髪に 夕日のかげる

〔橋本 円子〕
何時しかに 便り途絶えし 旧友に
賀状書きつつ 不安のよぎる
夫君より 代筆の賀状 賜わりて
病み臥す友の 無事に安堵す



◎『日興上人全集』
『同本尊集』が、学術賞を受賞

昨年の日興上人のご生誕六五〇年を記念して、興風談所から発刊された『日興上人全集』『日興上人御本尊集』は、発刊以来、宗の内外から高い評価を受けていたが、この度立正大学より「望月学術賞」が贈られ、その業績が称えられた。
なお、授賞式は、十一月八日に行われた。

幹事会 ニュース

一、南近畿教区一日研修会について
講中より四十五名が参加し、盛況のうちを終了いたしましたこと、感謝いたします。(山本)
二、その他
平成九年年間行事予定の最終の詰めと確認、及び御大会式の反省と感想を話し合い、次年度の資といたしました。

(総務・企画)

合同地区総会のご案内

合同地区総会を左記の日程で行います。
講員の皆様には、ふるってご参加下さい。



日 時	地 区
一月二十六日 (日) 午後一時	旭丘 / 大阪 / 堂池地区
二月二日 (日) 午後一時	槻木 / 緑丘 / 高槻地区
二月十六日 (日) 午後一時	庄内 / 服部 / 宝塚地区
二月二十三日 (日) 午前十時	箕面 / 川西 / 神戸地区

【恵日俳壇】

「宮下留代」
アチコチ 彼方此方と 義理を果して 年用意
除夜の鐘 石段登り 初詣



成人式のご案内

今年は、昭和五十一年四月二日から、昭和五十二年四月一日生れの方々が、新成人となります。毎年、法華講員のご子息で該当する方にはご案内を差し上げ、法華経・大聖人様の御宝前にてお祝いをしております。
当日は、お寺から記念品の贈呈、青年部からの祝辞や懇談会も予定しております。なお、該当しながらご案内の届かなかった方、また檀信徒のご子息で新成人と成られます方はどうぞお寺までお申込み下さい。

一月の行事

一日(水) 午前〇時 元朝勤行会

午前十時 正月勤行会

午後二時 正月勤行会

(一日)三日 十時と二時に読経)

七日(火) 午後二時 広基寺初お講

十二日(日) 午後一時 初お講・合同役員会

十三日(月) 午後一時 初お講

十五日(水) 午後二時 成人式

二十六日(日) 午後一時 合同地区総会
(旭丘、大阪、蛸池地区)

※今月の法華経講義はありません

平成九年度 年回表

壹	周忌	平成八年
三	回忌	平成七年
七	回忌	平成三年
十三	回忌	昭和六十年
十七	回忌	昭和五十六年
二十三	回忌	昭和五十年
二十五	回忌	昭和四十八年
二十七	回忌	昭和四十六年
三十三	回忌	昭和四十年
三十七	回忌	昭和三十六年
五十	回忌	昭和二十三年

恵日

平成九年一月号 通巻二十三号
平成九年一月一日発行

編集兼 菅野憲道
発行人

発行 恵日編集室

〒五六三 池田市槻木町一―一〇 源立寺内
TEL(〇七二七)五―一三―三五
購読料 定価一〇〇円(千別)